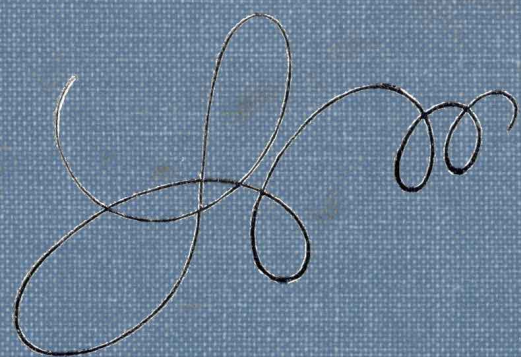




マラルメ全集 IV

書簡 I

筑摩書房

マラルメ全集 IV 書簡 I

一九九一年八月一日初版第一刷発行

☆

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二六・四

電話(〇三) 五六八七・二六八〇(営業)

五六八七・二六七〇(編集)

郵便番号 一一一・一九一

振替 東京六・四二二三

印刷 明和印刷株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

ISBN4-480-79004-7 C1397

乱丁・落丁本の場合は御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

凡例

一、本巻及び第五巻には、マラルメの書簡を収める。この「書簡Ⅰ」（第四巻）「書簡Ⅱ」（第五巻）に採録された書簡は、次項に記す『書簡集』から重要と思われるものを中心に、編集委員が選択し、編年順に排列したものである。取捨の基準等については巻末解説を参照されたい。本巻「書簡Ⅰ」には一八八五年までの書簡を収録した。

二、マラルメ書簡の最も包括的な集成は、現在のところガリマール版『マラルメ書簡集』全十一巻、十二冊（以下、『書簡集』と略称する）であるが、一部の名宛人に関してはC・P・バルビエ編『ステファヌ・マラルメ資料集』全七巻（以下、『資料集』と略称する）にも書簡が収められている。この二種の刊本の他に、少数の書簡を含む若干の単行本・雑誌が存在するが、これらに発表された書簡はいずれも『書簡集』に収録されているので、最終的に依拠すべき基本文献は『書簡集』および『資料集』である。前者のみに収められている書簡については、当然、そのテキストを翻訳の底本としたが、双方に収められている書簡については、後者のテキストを翻訳の底本とし、前者のテキストも常に参照することを原則とした。

三、本全集収録の書簡には検索および相互参照の便を考えて、一連番号を付した（本巻では一二九〇）。

また、各書簡末尾の「」内にローマ数字をもつて『書簡集』の書簡番号を示した。『資料集』にも同一書簡のテキストがある場合には、[DSM-v, pp. 318-319]のようにその略称DSMと巻数（ローマ数字で示す）、ならびに当該頁数を同じく「」で囲って併記した。なお、註の中では、『書簡集』の書簡番号は「」内に漢数字で記してある。

四、一連番号に続く名宛人は、一連番号とともに、各書簡の同定を便ならしめるために付したものである。名宛人の名は、概ね、『書簡集』の表記に準拠した。

五、各書簡に付けられた発信地、日付は、書簡原本の体裁に従った。但し、それらが原書簡に書かれていない場合は、封筒の消印、書簡の内容等から推定して「」内に補足した。補足部分の推定根拠は註に明示することを原則とした。

六、訳文中に用いた記号、その他は下記の通りである。

「」 単行本書名。

「」 新聞・雑誌名、作品群総題、個別作品標題、原典における引用符。

《》 美術作品題名。

〈〉 原典本文で大文字で書き出された語。

〔 〕 訳文中、訳者により補われた辞句および割註。ただし、三項、五項に関するものを除く。

傍点 原典本文でイタリック字体により記された語句。

ゴチック字体 原典本文で全大文字により記された語句。

七、第四巻に関係するマラルメが寄稿した新聞・雑誌は左記の通りである。（訳題の五十音順）

「アシニアム」 *The Athenaeum*.

「イリュストラシオン」 *L'Illustration*.

「ヴォーグ」 *La Vogue*.

「ヴォルテール」 *Le Voltaire*.

「キュッセ＝ヴァン＝図録」

La Semaine de Cusset et de Vichy.

「芸術家」 *L'Artiste*.

「芸術と流行」 *L'Art et la Mode*.

「響鐘」 *Le Rappel*.

「月刊美術評論」 *The Art Monthly Review*.

「現代高路詩集」 *Le Parnasse contemporain*.

「今日評論」 *Revue d'aujourd'hui*.

「最新流行」 *La Dernière Mode*.

「サンヌ新聞」 *Le Sennais*.

「自由芸術」 *L'Art libre*.

「新世界評論」

La Revue du Monde nouveau | Littéraire, Artistique & scientifique.

「独立評論」 *La Revue Indépendante*.

「ナショナル」 *Le National*.

「パピヨン」 *Le Papillon*.

「ジャン・ジャンリマン」 *Le Bien Public*.

「フランシエモンテ新聞」 *La Gazette de Franche-Comté*.

「文学・芸術復興」 *La Renaissance littéraire et artistique*.

「文芸共和国」 *La République des Lettres*.

「文芸・芸術評論」 *La Revue des Lettres et des Arts*.

「浴客新聞」 *Le Journal des Baigneurs*.

「リュテーム」 *Luïce*.

「両世界評論」 *Revue des Deux Mondes*.

「ルヴェ・クリティック」 *La Revue Critique*.

「ワグナー評論」 *La Revue wagnérienne*.

八、第四巻に関係するマラルメ著作の現行主要刊本については、本全集第二巻の凡例（第五項）に準ずる。

- (a) 『マラルメ全集』（アンリ・モンドール、G・ジャン・オーブリー編、ブレイアード叢書、ガリマール書店、一九四五年初版）。「解題・註解」では「ブレイアード版『全集』と略記。

Stéphane Mallarmé : *Œuvres complètes*, texte établi et annoté par Henri Mondor et G. Jean-Aubry. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1945.

唯一の現行『全集』であるが、テキストおよび巻末ノートに疎漏がすくなくらず見出される。

- (b) ステファヌ・マラルメ『イジチュール、ディヴァガシオン、アン・クー・ド・デ』（イヴ・ボンヌフォワ校訂、ボエジ―叢書、ガリマール書店、一九七六年）。「解題・註解」では「ボエジ―叢書版」と略記。

Stéphane Mallarmé : *Igitur, Divagations, Un coup de dés*, préface d'Yves Bonnefoy, collection Poésie, Gallimard, 1976.

廉価流布版だが、特にテキスト校訂の点で現在入手しうる最良の刊本。

- (c) 『マラルメ著作集』（イヴ・フラン・フアール編、クラシック・ガルニエ叢書、ガルニエ社、一九八五年）。

Stéphane Mallarmé : *Œuvres*, texte établi et annoté par Yves-Alain Favre, Classiques Garnier, Garnier, 1985.

目次

凡例

書簡Ⅰ〔一八六二—一八五五年〕

一八六二年——	5
一八六三年——	99
一八六四年——	154
一八六五年——	200
一八六六年——	260
一八六七年——	321
一八六八年——	352
一八六九年——	383
一八七〇年——	409
一八七一年——	428
一八七二年——	450
一八七三年——	460
一八七四年——	488

一八七五年——496

一八七六年——544

一八七七年——581

一八七八年——601

一八七九年——614

一八八〇年——649

一八八一年——656

一八八二年——664

一八八三年——670

一八八四年——679

一八八五年——700

阿部良雄・井原鉄雄・柏倉康夫・兼子正勝・川瀬武夫・菅野昭正・
竹内信夫・西川直子・松室三郎・立仙順朗・渡辺守章 訳

解説 菅野昭正——729

地図——741

書簡索引——1

マラルメ全集
IV

編集

松室三郎

菅野昭正

清水徹

阿部良雄

渡辺守章

書簡
I

本卷編集

菅野昭正

竹内信夫

川瀬武夫

兼子正勝

一八六二年（二十歳）

マラルメの実生活においても、また詩人としての生涯においても、決定的な出発点となった年である。まず詩人になる決意を固めていた彼にとって、生活を保証するための職業選択の問題。祖父母の反対を押し切って、一年ほど前から事務見習いとして続けていた登記所吏員の仕事に見切りをつけ、英語教師になる道を選ぶ。

つぎに偶発的事件としての恋愛の問題。サンスの町で出会った七歳年上のドイツ人家庭教師、マリイ・ジェラール（マリイ・ゲルハルト）を熱愛するようになった彼は、六月末に恋文を送るが最初は黙殺される。彼女がマラルメの求愛を受け入れたのはようやく八月に入ってからであった。十一月八日、二人はロンドンに相携えて（ただしマリイと同行していることは家族には秘密のまま）出発し、ソーホー、パントン・スクウェア九番地に住む。英語教師の資格を得るためには、英国留学は必須の要件でもあった。

またこの年はマラルメの作品が初めて雑誌や新聞に発表された記念すべき年でもある。一月と二月には、「パピヨン」誌に、年長の友人エマニエル・デ・ゼッサールの『パリ詩集』の書評と彼自身の詩「願ひ」（後に「あだな願ひ」と改題）が掲載され、続いて三月には「不遇の魔」（冒頭五詩節のみ）、「鐘つき男」を「芸術家」誌に、また「サンス新聞」には『パリ詩集』再評を発表している。五月には、友人たちとフォンテーヌブローに遊んだ思い出の記念として、デ・ゼッサールと共作の小冊子詩集『姫君たちの四つ辻』をサンスで刊行。七月にはディエップの新聞に詩二篇を掲載し、九月になると初期の注目すべき詩論「芸術の異端、——万人のための芸術」を「芸術家」誌に発表している。

この年の五月にはアンリ・カザリスと知り合い、以後七一年まで十年間にわたって、親密な友情と極めて重要な文学的証言となる数多くの書簡とが交わされることになる。

一 デモラン氏宛

サンス、一八六二年一月十七日〔金曜日〕

お祖父さま、

心に思っている事柄は、僕がお二人に、お祖父さまの霊名祝日と聖エティエンヌの祝日と元日とにお話した、あの全部の中が含まれていたのです。僕は元氣を出して「登記所」の仕事に粘りつよく続けてみたいと思っていました。でも、どう考えてもこれは、僕には全然向いていないのです。

高等中学を卒業したとき、僕は大学にはいりたいという志望を明らかにしていました。それが僕の気質には一番よく合っていることだったのです。「登記所」は、本当にそこが気に入っているのではない限り、時間を使い果たすだけではすまらず、人間も使い果たしてしまいます。これとは逆に、大学でしたら、教授は勉強したり教えたりすればするほど、人間として知的な価値をますます多く持つことになるのです。

それにまた、この、どんなポストよりも生活の安定する教授職の中には、外国語の教授職も加えておくべきです。毎年、試験がバリでおこなわれますが、今年はそれがどんなものなのか、しっかり見ておくというそれだけのために受験してみようと思います。来年「英語科」を目指して真剣にこれを受けるためです。

合格すれば、教員に任命されますが、これは不確定の収入とか個人教授とかを入れなくても固定給で「年俸」二千フランにはなります。これが「登記所」でしたら、今から五年後に、それもどこかの村でそれを稼ぐという条件で、やっと千六百フランというところでしょうか。父は年金生活に入ろうとしています、金を使う一方、何の実入りもなく五年間も待つなど、全く悠長なことかもしれません。

教職にあつて、僕は文学士号を得る準備をしますが、これは専ら僕の博士論文の審査を受けるようにするためです。外国の或る作者についての論文をひとつ書くのですが、これは仕事であるばかりではなく、ひとつの楽し

みでもあるでしょう。

いつか博士になれば、将来が開けて来ます。これにイタリア語とスペイン語との基礎的な心得があれば、どこかの学部^の外国文学の教授の地位を手に入れることができるのです。

これで、〈官庁〉での上級職と同じくらい輝かしい面もあるのだということがおわかりでしょう。仮にそこまでは行かなかったとしても、少なくとも平穩に暮らせるのです。これは〈登記所〉が持つ大きな魅力のひとつでもあります。僕にとっては同じひとつ事なのです。

僕がよく知っている二十四歳になる青年の言うところでは、——この人は去年はこの高等^リ中学で英語の教授をしていました。今はサン・シールで同じ職にあつて、俸給と個人教授で五千フランを得ているのですが、——この人の言うところでは、大臣が、生徒たちの笑いものになっている年老いて人の言いなりになるイギリス人教員たちをもちや受け入れなくなつてからというもの、目下のところ、——ここは僕の意見ですが、文学的な才能のある若いフランス人教員たちにとっては、夢ではない将来性がある、そうです。

このところ、一週間、いや十日間も僕はこのことをよくよく考えてみました。お祖父さまは、このことについての母さんからの手紙を多分お受け取りになつたでしょう、それとも、もしまだでしたら、これから受け取られると思います。僕たちは家族じゅうでこのことを真剣に話し合つたのです。特に、つぎの点をよく吟味して御検討下さい。わが家の財力は間近に迫つた〔父の〕退職のために落ちていきますから、僕はもう、四、五年はおろか十八カ月しか扶養されているわけにはいかなくなるでしょう。

お祖父さま、お願いです、——いや、僕のことを心にかけて下さつてることを知り尽しているのですから今さからお願ひするまでもありません、——このことをお祖母^{ばあ}さまともどもお考えになつて下さい。お祖父さまには人生の、また、様々なことの経験^{けんげん}が、おありです。お祖父さまこそ、僕を導いて下さらねば。

さよならを申し上げる前に、お伝えしておきたいのですが、父は休職中で、職務を代行するために臨時雇いが一人います。容態は好転も悪化もせず、どんな天候がのぞましいのやらわかりません。湿気が多くて暖かいと神経は休まるようですが、沈みこんで重苦しそうですし、寒くて刺すようだと極度に興奮するのです。さようなら、

お祖父さまを、それからお祖母さまも、心から抱擁いたします。伯母さま方や従妹たちにもよろしく。

ステファヌ

1 翻訳は『資料集』のテクストに拠った。また、名宛人も本書簡では『資料集』に従うを可と判断した。『書簡集』では「デモラン夫妻宛」とされているが、文面は直接にはあくまで「デモラン氏」に宛てたもの。これに加えて、『資料集』にはこの書簡の封筒・消印も紹介されており、封筒の上書きは「ヴェルサイユ、ヌーヴ通り二三番地、デモラン氏」と、姓のみが記されている。なお、『資料集』には、日付の後に多くの場合曜日が補足されている。本書では「」内にそれを記しておいた。

アンドレ・マリ・レジェ・デモラン（一七八九年九月—一八六五年十二月）はマラルメの母方の祖父。最高法院検事の子としてパリで生まれ、一八〇七年以降約十年間軍隊生活をしたが、一八一六年から官途に就き、以後ジャンパーニュ、ノルマンディーと、地方での登記所収税官を歴任、その間一女エリザベート・フェリシーをもうけた（一八一九年一月）。一八三〇年よりバリ勤務、息女フェリシー（当時二十二歳）が同じ大蔵省登記管理所に勤務する副主任ニュマ・フロラン・ジョゼフ・マラルメ（当時三十五歳）と結婚した一八四一年六月には登記管理所第一局長であった。ニュマ夫妻はバリ二区（現九区）ラフェリエール通りのデモラン家と同番地に新居を構え、ここでステファヌ（戸籍上はエティエンヌ）、マリアの二児をもうけたが、四四年マリア出生の後バリ郊外パッシーに家を購入して転居している（セーヌ県サン・ドゥニ郡ヌクイイ小郡パッシー村、字ブーランヴィリエ、ラヌラグ通り。一八六〇年にパリ市に編入される）。デモラン夫妻も、一八四八年以前にはパッシーに転居した。一八四七年八月二日、マラルメの母フェリシーはブーランヴィリエで死去（二十八歳）、フェリシーの死から約一年後に父ニュマはアンヌ・ユベルティヌ・レオニード・マチュー（当時十九歳）と再婚（一八四八年十月二十七日）、ステファヌ、マリアの兩人はデモラン夫妻の許で養育されるが、ステファヌは一八五〇年九月から祖母ルイズ・エティエンヌ・デモランの方針で寄宿学校に入り、以後五六年三月までパッシー地区の寄宿学校少なくとも三校を転々とする。妹マリアは一八五七年八月にパッシーで死去。デモラン夫妻は一八六〇年三月、デモラン氏の退官を機にヴェルサイユに転居、同じく大蔵省登記管理所に勤務していたこともある旧知の詩人エミール・デシャンの隣人となった。この書簡も前述の通りヴェルサイユに送られている。

2 セーヌの支流ヨンヌ河右岸の古い都市（ヨンヌ県）。旧ローマ軍駐屯地としてその歴史はガロ・ローマン時代に遡る。マラルメの父ニュマは一八五三年三月、サンスの抵当権設定の登記管理官を拝命、サンスのシナゴグ通りに居を構え、ここに事務所を置く。一方ステファヌは五六年四月帝立サンス高等中学に入学、ここでも寄宿舎生活。この秋の新学期から第三学級（高等中学課程の第四年次）に進んだ。父ニュマは後妻アンヌとの間に一男三女を設けたが、一八六〇年二月におそらく

高血圧症で病臥、六月には代理人の助力を得て職務を再開するが、九月に再び卒倒、病状は一進一退を繰り返し、好転することがなかった。ステファヌは六〇年八月、第一回の大学入学資格試験に失敗するが、十一月に第一回試験の不合格者を対象とする第二回試験に合格、文学部門の大学入学資格者として中等教育を修了した。高等中学在学中に上級生ウージェーヌ・ルフェビュールの手引もあって、既に抜き難く文学を志望していたが、家庭の状況が大学進学を許さず、六〇年の年末近くから或る収税吏の許で臨時雇いとして働きはじめていた。登記所の仕事で自分の肌に合わないことを痛感するが、将来の進路を決めるべきこの時に当たって、病父は相談相手にならず、義母アンヌの理解を得て、祖父母に相談すべく書簡のやり取りとなったわけである。なお、一八五三年以前の父ニュマの経歴を以下に略記しておく。

3 ニュマ・フロラン・ジョゼフ・マラルメ（一八〇五年十二月—六三年四月）は大蔵省関係の地方官吏の第五子として父の赴任先ベルギーのワレムで生まれた。ワレムは当時フランスの支配下にあり、父フランソワ・オーギュスト・アレクサンドルはこの地の土地収税官であった。父はその後マコン、ディジョンを経て最後はボルドーの登記管理監査官となり、ボルドーで歿した。ニュマは一八二五年マコンの登記所見習職員を振り出しに、アミアン、シャルトルなどで地方勤務ののち、パリで大蔵省登記管理所副主任に就任、以後の経歴は註1、および本項の前半に記した通りである。

4 祖父アンドレの霊名祝日、聖アンドレの祭は十一月三十日。

マラルメ自身の霊名祝日、十二月二十六日である。マラルメの戸籍上の名がエティエンヌであることは註1で述べたが、マラルメは生後すぐに、家族の間ではエティエンヌのギリシア名を採ってステファヌとよばれ、本人も終始ステファヌと称した。

5 義母アンヌ。一八五九年二月、ステファヌは「高熱と激しい頭痛を伴う」リユーマチ性疼痛（足部）に見舞われるが、義母の看病が懇切であって、そのこまやかな心遣いの中に彼は再び「母」を見出したようである。将来の志望を決めるに際しても、この年若い義母は息子の側に立ってデモラン夫人宛書簡でマラルメの口添えをする傍ら、志を遂げるための実際的な方途をサンス高等中学の校長やデ・ゼツサル教授に訊ねてくれている（書簡二を参照）。

[1] [DSM-V, pp. 348-349]

ニ デモラン氏宛

サンス、一八六二年一月二十六日〔日曜日〕